

(5) 落花生
ア 殺菌剤, イ 殺虫剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項
				褐 斑 病	黒 渋 病	そ う か 病	コ ガ ネ ム シ 類 幼 虫	ア ブ ラ ム シ 類			
〈 殺 菌 剤 〉											
ジ マ ン ダ イ セ ン 水 和 剤	マンゼブ	有機硫黄	F:M03	◎		◎					
ダ コ ニ ー ル 1 0 0 0	TPN	その他	F:M05	◎							
ト ッ プ ジ ン M 水 和 剤	チオファネートメチル	ベンゾイミダゾール	F:1	◎	◎	◎					
ベ ン レ ー ト 水 和 剤	パノミル	ベンゾイミダゾール	F:1	◎	◎	◎					
硫 黄 粉 剤 5 0	硫黄	無機殺菌	F:M02	◎	◎						
〈 殺 虫 剤 〉											
オ ン コ ル 粒 剤 5	ベンフラカルブ	カーバメート	I:1A				◎				
ス ミ チ オ ン 乳 剤	MEP	有機リン	I:1B					豆種		豆種:【豆類(種実)登録】	
ダ イ ア ジ ノ ン 粒 剤 5	ダイアジノン	有機リン	I:1B				◎				
ト ク チ オ ン 細 粒 剤 F	プロチオス	有機リン	I:1B				◎				
フ オ ー ス 粒 剤	テフルリン	ヒスロイト	I:3A				◎				

(5) 落花生
ウ 土壤消毒剤

農 薬 名	成 分 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項	
			ケ ラ	ネ キ リ ム シ	コ ガ ネ ム シ 類 幼 虫	ハ リ ガ ネ ム シ 類	セ ン チ ユ ウ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類	白 絹 病				
ク ロ ー ル ピ ク リ ン	カルピ°クリン	I:8B	豆種	豆種		豆種	豆種			豆種				豆種:【豆類(種実)登録】
ク ロ ピ ク 8 0 ド ジ ョ ウ ピ ク リ ン ド ロ ク ロ ー ル	カルピ°クリン	I:8B		豆種		豆種	豆種			豆種				豆種:【豆類(種実)登録】
ク ロ ル ピ ク リ ン 錠 剤	カルピ°クリン	I:8B					豆種			豆種				豆種:【豆類(種実)登録】
テ D C 油 D - 剤 D D	D-D	I:8A			◎			◎	◎					

エ 病虫害防除法（落花生）

（ア）褐斑病 *Mycosphaerella arachidis*

（防除のねらい）

黒渋病より早い時期から葉、葉柄に発生する。葉では始め黄褐色小斑点で、のちに3～10mm前後の円形斑点となる。融合して大型不正形となることがある。病斑の周囲はしばしば黄色の環ができる。病葉は早期に落葉しやすい。本病菌の潜伏期間は20日前後である。菌糸が落葉中で越冬し伝染する。

（耕種的防除法）

連作を避ける。被害残渣を焼却したり、ほ場外へ持ち出す。

（イ）黒渋病 *Mycosphaerella berkeleyi*

（防除のねらい）

収穫前、高温多湿の時、急速に病勢が進展するので、発病をみたらできるだけ早く薬剤を散布する。

（耕種的防除法）

密植、連作を避け、リン酸、カリ肥料を十分に施す。

（ウ）白絹病 *Corticium rolfsii*

（防除のねらい）

土壤中に菌核、菌糸の形で越冬して伝染源となる。病原菌は有機物をエネルギー源としているので、有機物の分解促進を図るとともに、雑草などの有機物を株元に与えないなど、栄養源の排除に努める。また、酸素を好む菌なので、深耕によって病原菌を土中深く埋め、発病を抑制する。

本病は発病してからでは防除が困難なので、耕種的防除法により発病を避けるように留意する。

（耕種的防除法）

- （1）深耕し、播種前に消石灰を10 a 当り150～200kg施用してpHの適正化と有機物の分解促進を図る。
- （2）雑草を抑え、過度の土寄せを避ける。
- （3）発病株は除去し、発病の著しい畑はイネ科作物を4～5年栽培して菌密度の低下を図る。

（エ）そうか病 *Sphaceloma arachidis*

（防除のねらい）

前年多発をみた地域では、7～8月に多雨の年には多発となりやすいので注意する。

（耕種的防除法）

- （1）連作をしない。
- （2）落花生茎葉の堆肥は使用しない。
- （3）被害株の茎葉は乾燥後焼却する。
- （4）マルチ栽培を行なう。

（オ）さび病 *Puccinia arachidis*

（防除のねらい）

病勢の伸展が急速であるので、下葉での初発に注意し、発病初期から他病害との薬剤同時防除を行う。

（耕種的防除法）

発病の多い地帯ではマルチ栽培を行ない、被害（収穫に対する）を回避する。

(カ) ヒラズハナアザミウマ

(防除のねらい)

開花初期頃から花及び未展開の葉に寄生する。葉の被害が大きい。
乾燥する時期の発生が多い。

(耕種的防除法)

被害の品種間差が大きい。発生の多いところではワセダイリュウを避け、千葉半立を選ぶ。

(キ) マメアブラムシ

(防除のねらい)

5月頃の芯葉への寄生に留意し、早目に薬剤防除を行なう。

(耕種的防除法)

寒冷紗などによる障壁をほ場周辺に設置し、飛び込みを防止する。

(ク) コガネムシ類

(防除のねらい)

ヒメコガネが主体である。成虫による葉の被害、幼虫による葉実被害とがある。それぞれ防除法が異なる。

(耕種的防除法)

堆肥などの有機質が多いと幼虫の発生が増加するので、多発の場合は控える。

(ケ) ハリガネムシ類

(防除のねらい)

幼虫による莢実被害を防止するため、播種前又は播種時の土壌施薬によるコガネムシとの同時防除を行なう。

(耕種的防除法)

幼虫の活動開始期に屑いもなどを一定間隔に埋没して幼虫を誘引する。